生者普寂に自他共の救済志向が見出せるのではないか。ここではじめて著者のいう近世思想史としての統合が成り立つ。

最後に、著者が強調する普寂思想近代先駆論の問題。著者は、近代主義の視点から「近世に近代の萌芽を認めて積極的に評価しようとする」丸山真男や中村元の見直しが始まったが、「近世江戸を再評価することは近代の終焉ではなく、近代の成熟の始まりである」（一〇頁）という。思わず読み直した。江戸の再評価は近代が否定した江戸の復権であり、それは近代の終焉を意味しているはずである。そのような混乱をもたらしたのは、著者には「近代的自我の自明性」を前提にして「そこに近代的信仰の確立を読み出す」という「転倒」（福島栄寿「『歎異抄』解釈の一九世紀」、『江戸の思想7 思想史の一九世紀』）があるのではないのか。近代の学知を近代性において評価するのではなく、近代国民国家による近世思想の新たな編成と見ることが提起されて既に久しい。大乗非仏説によって世俗倫理こそ仏教の真意と説いたと著者が指摘する仲基の思想（一〇三頁）などは、まさに近代日本の学知として再構成されるべき絶好の素材であった。村上専精が仲基を発見したのは偶然ではない。歴史的実証とそれを超えて大乗非仏説にして仏説という普寂の思想が、近代仏教の基礎となったのも、同じである。近世の知が近代国民国家において再構成されたという視点は、今や大きな潮流となっている。すくなくともこうした視座への方法論的議論が不可欠であった。

（大谷大学名誉教授）

## 樋口浩造著
# 『「江戸」の批判的系譜学——ナショナリズムの思想史』
（ぺりかん社・二〇〇九年）

桂島宣弘

## 一

思想史学とは何をするものなのか、そして何をしてきたものなのか。この点を方法的に省察するための好著が本書である。著者によれば、これまでの思想史学は、テクストの背景やテクストの書き手の意図・真意を記述しようとすることで、テクストを自己・近代の解釈や想像の下に「飼い慣らし」、結局は自己・近代を再確認するものとなっていたという。そうではなく、テクストを厳密な意味での言説（discourse）として捉え、テクストの意味はテクストの外部で発生することにこそ留意して、その外部にどのような権力が働いているのかを分析・記述すべきだ、というのが著者の明快な主張である。この方法を、著者は「批判的系譜学」とよぶ。そして、これまでの思想史学がテクストを解釈する際に繰り返し再確認してきたものが、まさに近代ナショナリズムの語りであったとするならば、過去（江

戸）に投影されたその語りを暴きだし、「乱反射する時間」の中にテクストを置き直し、その「他者性」と向き合うことで、逆に自己・近代を揺さぶる思想史が記述されなければならないと著者はいうのだ（序章）。こうした主張・方法的立場には、ニーチェ、フーコーなどの議論の影響もさることながら、現在も思想史学の方法的刷新の先頭を走り続ける、著者の師である子安宣邦氏の思想史（子安思想史）の大きな影響があることはいうまでもない。最初に本書の目次を以下に掲げておく（節題は省略した）。

序章　「江戸」の系譜学――日本思想史方法論として

第1部　ナショナルな視線と闇斎学派

第1章　破門と義絶の学派――山崎闇斎学派における師説と再語り

第2章　語りの中の「武士道」――批判的系譜学の試み

第2部　親中国的普遍性の主張と「心の言説」

第3章　度会延佳と近世神道の成立

第4章　教説の時代と「心の言説」

研究の視角――日朝比較思想史という試み

第3部　中国的世界像の動揺と自国意識

第5章　近世神道と教説の時代――垂加神道を中心に

第6章　「江戸」の自国意識――山崎闇斎学派とナショナリズム

## 二

第1章では、山崎闇斎学派に対する近代からのナショナルな語り、たとえば浅見絅斎『靖献遺言』とともにある語りが、近代の創りだしたものであることは当然としても（それを指摘するのは容易いことだ）、闇斎学派自体の正統化の語りによっても規定づけられたものであることが明らかにされる。すなわち、破門と義絶が繰り返され、道統が争われ、記号化した「師・闇斎」を信じることを競い合うその学派の語りにこそ、その学派の、あるいは『靖献遺言』の神話化の構造が潜んでいたことを、著者は暴きだしたのだ。近代の語りが、「江戸」のテクストとどのように結びつくものなのかを明らかにすることは、きわめて難度の高いテーマであるが、師説を占有的に語ることを構造化している山崎闇斎学派のテクストが、「江戸」から近代に連続的に再生産され続けることで、いわば十七世紀の「教説」から近代のナショナルな言説へと転生していくありさまが、ここでは鮮やかに示されている。「教説」ではなく、「事実」を語ろうとする国学者のテクスト構造が、近代ナショナリズムの歴史意識と親和性の強いものであることを明らかにした第5章での指摘と並んで、本書のもっとも重要な達成だとわたくしは考えている。第2章では、武士道が近代における語りであることが俎上にあげられるが、ここでの著者の関心も、（それが武士官僚の姿と乖離したものであったことよりも）「道徳」として語られ続

けてきたという、武士道論のテクストの共通構造だ。それは井上哲次郎・和辻哲郎・丸山真男は無論のこと、現在に至るまで共通した構造を有しているのであり、そこに著者は総力戦期を超えて現代にも再生産されている日本文化論的言説の特色を捉えている。

第3・第4章は、一転して近世的知の特性について、学派を超えて捉えようとする。一言でいえば、それは「親中国的普遍性」の主張と万人に開かれた「心の教説」としてあったということだ。取り上げられているのは度会延佳・中江藤樹・鈴木正三らである。無論、ここでも著者はあくまでインター・テクスチュアルな権威と権力をめぐる闘争に注目し、それが「心の教説」として「心の争奪戦」を行っていたこと、そしてそれがたとえば神武天皇・アマテラス＝泰伯説の普及にみられるように「中国的普遍性」の内で繰り広げられていたことなどを、テクスチャルな構造として提示するのである。第5・第6章は、わたくしにとっては、もっとも興味をそそられる、「日本」が近代とは異なる、どのような価値づけのもとに見いだされ正当化されたのか」を検討している部分である。ここでも、著者は「思想内容」よりも「説得の様式・問題構成」を焦点化する。その結果、十八世紀には、中国を考えることが、「我国」の「道」を考えることと不可分の問題として浮上してきたこと、君臣関係の「大義」に特化して日本の優越を主張する「我国の教説」が、闇斎学派から垂加神道派への転回において「説得の様式」として登場してくること、同時にそれは、垂加神道派のみの様式ではなく、西川如見など実は十八世紀の広く共有された様式であったこと、しかしそれは近代ナショナリズムとは異なる「心の教説」の枠内にあることを提示するのである。これと同時に、「儒・仏・道」としてあった三教が、「儒・仏・神」に入れ替わったとする指摘も重要である。それは、決して道教と神道が入れ替わったという程度の問題ではなく、日本を語りうるものとしての神道が、そして中国＝儒教、インド＝仏教という、思想を地域・空間で区分する思考法が、ここに生成されてきたこと、それこそいかに近世的ではあっても、やがて国学をへて近代へと連なる認識であった、と著者はいうのである。思想史を単純に社会還元することに慎重な著者は、その背景には踏み込まないが、この転回の背景に明清交替をみているのは明らかである。

## 三

同じ近世思想史研究会（のち思想史文化理論研究会）に参加して、「言語論的転回以後」の思想史研究の方法について熱心に議論してきた者にとって、本書からは、あくまでテクスト論にこだわりながら、その言説構造から思想史の記述を目ざすべきだ、という著者の渾身の主張が、まさに当時の研究会の雰囲気と共に伝わってくる。シェーマ的に近世と近代を切断し、かつ時代背景を安易に論じるわたくしとは異なる、原理主義的とも

いえる方法論へのこだわりが、本書の大きな特質である。無論、その分、叙述には慎重さと表裏の関係にある逡巡もあって、分かりにくい部分もある。闇斎学派から垂加派への転回をどのように考えたらよいのか、なぜ近代ナショナリズムの主張が闇斎学派の枠組みを「内容」としたのか、著者のいう「乱反射する時間」の中にテクストを置くこととは、歴史意識の問題としてはどのような位相にあるものなのか、「研究の視角」として朝鮮儒学における箕子朝鮮説・檀君朝鮮説と泰伯論などの比較の有効性がのべられているが、それは「親中国的普遍性」とナショナリズムの関連として妥当なものなのか、など色々と議論したい問題もある。そして、何よりも著者が「心の教説の時代」として近世を捉えていることについては、テクスト論としては、あまりに漠然としているのではないか、という印象も消し去りがたい。一方での開かれた知と他方での知の特権化という論点も、やや分かりにくい部分であった。

とはいえ、本書が「グローバリズム化されたナショナリズム」的言説が跋扈している時代に、それを「江戸」から考え相対化するための書として刊行された意義は大きい。ナショナリズム論を思想史学がどのように受け止めるべきなのかについても、本書から学ぶことも多い。その意味では、思想史学を方法的に開いていく書として読むこともできるだろう。与えられた紙幅が限られており、あまりに要約しすぎたため、著者の意に添えなかった点については、お詫び申し上げたい。

（立命館大学教授）

## 前田勉著
# 『江戸後期の思想空間』
（ぺりかん社・二〇〇九年）

松田　宏一郎

## 一

一九九六年刊行の『近世日本の儒学と兵学』（ぺりかん社）から数えて、著者の四冊目の論文集である。質の高い論文を次々と公刊する著者のタフさには驚嘆するばかりであるが、それだけでなく、新たな著作を出すたびにその前の著作で提起された問題意識が継承され、さらに深まっているという点に感銘を受ける。

本書『江戸後期の思想空間』は、前著『兵学と朱子学・蘭学・国学』（平凡社、二〇〇六年）で提示されていた、徳川の兵営国家体制から天皇制をその機軸とする国民国家への発展という大きな変動枠組みを前提としながら、近世後期の思想史にあらわれる思想家・思想作品を追跡する作業を継続している。前著で示されていた近世後期の「功名」の追求、ナショナルな「国益」の意識、天皇の権威への関心が高まることといった点については、前著よりもさらに幅広い思想家・思想作品の分析